

早稲田大学ラグビー蹴球部における心理的競技能力について

About the ability of a psychological competition in Waseda University rugby football club

1K05A191

堀内 哲

指導教員

主査 山崎勝男先生

副査 吉永武史先生

1. 序論

昨今、様々な運動やスポーツが世の中には溢れている。その中には走る、泳ぐ、投げるといった単純な運動やスポーツから、多様なボールや道具を使ったルールや技術が複雑な運動やスポーツなど多彩なものがある。また、一口に運動やスポーツといってもそれを行なう目的は人によってそれぞれ異なり、大きく三つに分けられると考える。そのスポーツはそれを行なう動機によって健康スポーツ、競技スポーツ、趣味・遊びに分けられる。競技スポーツではそのスポーツを行なうこと自体がそのスポーツを行なっている動機になりうる。

ではそのような動機付けによって行なっている競技スポーツの選手は心理にどのような影響を及ぼすのであろうか。また、特に目標が高い競技スポーツを行っている選手の心理的競技能力はどのような特徴を示すのであろうか。早稲田大学ラグビー蹴球部の選手を実際に調査し、その実態を探る。早稲田大学ラグビー蹴球部は毎年1月に行なわれる全国大学ラグビーフットボール選手権大会にて優勝し、優勝したときのみに歌うことのできる第2部歌の荒ぶるを歌うことを目標にしている歴史と伝統のあるチームである。

2. 方法

2008年11月中旬、早稲田大学ラグビー蹴球部に所属している選手82名を対象に市販の心理的競技能力診断検査(DIPCA, Diagnostic Inventory of Psychological-Competitive Ability for Athletes)を行ない、集計し、合計得点平均と学年別、ポジション別の得点平均を算出し、その

特徴を探る。

3. 結果及び考察

DIPCAによって調査することのできる12の尺度を順にみていき、検証する。総合判定ではいたって平均的な数値であり、早稲田大学ラグビー蹴球部全体では特筆するほど全体的な心理的競技能力が高いもしくは低いということはない。しかし学年別では最上級生である4年生が非常に高い数値を出した。これは最大目標である大学選手権まで2ヶ月を切った状況で調査を行なったため、ラグビーに対する熱意が非常に大きいものであるということが分かった。ポジション別ではバックローとセンターが大きく点数を伸ばした。尺度別にみていくと12の尺度はそれぞれ異なった結果になった。

4. 総評

ほぼ全ての尺度において4年生の平均得点が一番高い得点となった。早稲田大学ラグビー蹴球部においては4年生の力はラグビーの技術のみならず、心理的な強さもあらゆる尺度においてずば抜けていることがわかった。しかし、予測力、決断力、判断力などの尺度では学年が上がるに連れて得点平均が高くなっていることから、これらの尺度は経験によるものが多いと考えられる。ポジション別に見ていくと、フロントローは全体的に平均よりも低い得点が重なり、トータル的に一番心理的競技能力が低いという結果であった。ロックは尺度によってムラが大きいということが分かった。バックローはどの尺度も比較的上位の得点で

あり、心のバランスがよく取れている。ハーフ団は高得点を取った尺度から目標設定が高いということがいえる。ところが目標設定が高すぎるあまりに精神が不安定な可能性がある。センターが高得点を出した3つの尺度は自分にベクトルを向ける尺度であり、その能力が優れているというのは社会に出て役立つと思われる。ボックスリーは

平均的であった。心理的競技能力は普段の練習や試合などでは目に見えてわかるものではなく、こうした調査や検査で点数化することによって知ることができる。特に競技スポーツではこの心理的能力は思わぬところで勝敗に影響する場合があるので積極的に検査してみることが望まれる。